

第二十三回 (株) USEN 番組審議会 議事録

開催日時：平成 20 年 2 月 16 日 16 : 00～
開催場所：(株) USEN ミッドタウンタワー33F
F07 会議室

出席者 委員：小林亜星、有馬祐行、山本武司、渡辺英夫（順不同・敬称略）
放送局側：3 名

議事内容

1. 会社動向、放送事業についての報告
2. 番組課題

D/H-42「アダルト・オリエンテッド歌謡」について

3. 番組審議

- 人口の半分以上が 50 代以上となる時代を迎え、アクティヴシニアをメインターゲットに、耳の肥えた彼らの鑑賞に堪えうる、現在の「日本のポップス」を提供し、心を充足させる新たなライフスタイルのサポートを目指すというコンセプトの下、USEN では約 4 年前より本番組を放送している。
- 一過性の流行や、チャートなどにとらわれず、上質な音楽を聴ける番組として、爆発的とは言えないまでも、根強い固定ファンがいる。
- 秋川雅史「千の風になって」や、すぎもとまさと「吾亦紅」から、さだまさし「窓」まで、最近死生観をテーマとした楽曲がヒットしている。こうした、人の生き方に焦点をあてた、歌詞がしっかりと耳に入ってくる楽曲がこれから支持されて行くのではないか。そういう意味でも、今年は本番組に対する支持が一層広がっていくのではと期待している。
- 歌詞の素晴らしさが、そのアーティストが長く輝き続ける大きな要素であると感じる。
- 30 分～1 時間程度聞いていると、それなりに雰囲気バラつきがあり、コンセプト立ての難しさを感じる。BGM として聞いた場合、目に映る情景と歌詞がリンクするととても気分が良いが、それが 2、3 曲続いたかと思うとまた途切れて…という繰り返しである。
- 現在、古くから活躍しているアーティストの新しい音源から、曲調としてはあまり激しくないものを選んでいく。アーティストの男女比は 3 : 7～4 : 6 くらい。男性は熟年に至るとブルースに傾倒する人もいるため。
- 古くから活躍するアーティストの作品は、お金をかけてレコーディングされたものが多く、とても質が高い。特に伴奏を聞くとそれがわかる。
- アーティストの人は良いと思うが、曲がバラエティに富みすぎていると、コンセプトがわかりづらくなる。ラブバラードは古くからポップスの王道なので、ラブバラードの番組としてコンセプト立ててみてはどうか？外国人のリスナーに日本の歌謡曲を好きになってもらうのにも良いと思う。
- 日本の高層ビル、摩天楼の風景に合う日本の楽曲というコンセプトもいいかもしれない。
- 多様性と一貫性のジレンマはあると思うが、系統立てた見方の中で、スタンダードの重要性というものがある。ラブバラードでスタンダードを提唱してみるのも良いだろう。
- 背景や話題性をもって売れているものと、音楽そのものの質が評価されているものとを分けた方がコンセプトがはっきりするが、話題作りがプロモーション手法として確立されていることも事実であり、放送する側としてはその点でもジレンマを抱えている。

- 設立時からある程度の年月を経てみて、改めて番組名について検討の余地はないか。一般的な日本人が「アダルト」という言葉から受けるイメージについても考えるべきかもしれない。
- 熟年世代向けというコンセプトはとても良いので、「熟年世代」をうまく言い表すような言葉があれば良いのではないか。
- 「有意義」「価値がある」「聞き流すのがもったいない」というイメージが名前にあると良い。
- 「珠玉の J-バラード」という番組名も良いのではないか。